

【元祖法然上人御法語】(第二)立教開宗

おおよそ佛教ぶつぎょうをおおしといえども、所詮しよせん、戒定慧かいじょうえの三学さんかくを
ばすぎず。所謂いわゆる小乗しょうじょうの戒定慧かいじょうえ、大乘だいじょうの戒定慧かいじょうえ、顯教けんぎょうの
戒定慧かいじょうえ、密教みつぎょうの戒定慧かいじょうえなり。しかるに、わがこの身みは戒行かいぎょうに
おいて、一戒いつかいをもたもたず、禪定ぜんじょうにおいて一つもこれをえ
ず。人師にんじしやく釈しやくして、尸羅しら清淨しょうじょうならざれば三昧現前さんまいげんぜんせずと
いへり。又また、凡夫ぼんぶの心こころは物ものにしたがいてうつりやすし。たと
えば猿猴えんこうの、枝えだにつたうがごとし。まことに散乱さんらんして動どうじや
すく、一心いっしんしずまりがたし。無漏むろの正智しょうち、なにによりてか
おこらんや。若し無漏むろの智劍ちけんなくば、いかでか悪業煩惱あくごうぼんのうの
きずなをたたんや。悪業煩惱あくごうぼんのうのきずなをたたずば、なんぞ
生死繫縛しょうじけいばくの身みを解脱げだつすることをえんや。かなしきかな、か
なしきかな。いかがせん、いかがせん。ここに我等われらごときは、
すでに戒定慧かいじょうえの三学さんかくの器うつわものにあらず。この三学さんかくのほか
に、我が心こころに相応そうおうする法門ほうもんありや、我が身みに堪たへたる修行しゆぎょうや
あると、よろずの智者ちしやにもとめ、諸もろもろの学者がくしやにとぶらいしに、

おしうるに人もなく、しめすに輩もなし。然る間、なげ
きなげき経蔵にいり、かなしみかなしみ聖教におかいて、
手ずからみずからひらき見しに、善導和尚の観經の疏の、
一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近
を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づ
く、彼の佛の願に順ずるが故にという文を見得てのち、
我等がごとくの無智の身は、偏にこの文をあおぎ、もはら
このことわりをたのみて、念々不捨の称名を修して、
決定往生の業因に備うべし。